ホームページ

「感謝すべき一言」

中央図書館事務部
図書総務課　居町あおい

「意外と学がないね。」
10代の頃、読書好きの人達の話の輪に入れず、そんな言葉を投げつけられた事がありました。家族はみな読書好きで、本棚には様々なジャンルの本が並んでいました。いつでも本を手に取れる環境にあったのにもかかわらず、取らなかったのは、ただきっかけがなかったからだと思います。

「読書は、漢字や語彙の知識を増やすためのもの」くらいの気持ちで、読書するようになりました。何冊か経て、衝撃的に出会った本があります。

ペルシア絨毯に心惹かれた一人の女性が一枚の絨毯に織り込まれた五千年の文化や歴史を知り、人間にとって何が大切かを求めて生きていくという内容の本でした。インパクトが大きかったのは、その女性が京都祇園祭で、山鉾の懸装としてかけられたペルシア絨毯に魅せられていく場面です。一瞬、それがミスマッチに感じたものの読み進むにつれて、何か神秘的な感動を受けた事を思い出します。ペルシア絨毯に対する興味がすごく湧いてきて、山鉾を見に実際に祇園祭りに出向いたほどでした。大変高価なものであることを後で知り、さすがに手に入れたいとまでは思いませんでしたが、遠くから見ても、とても華やかで手にとって肌触りを確かめたくなるような色彩でした。

この本で、初めて登場人物や物語の繊細な描写を自分なりにイメージしながら読み進めていく楽しみを知りました。これが読書の醍醐味だと私は思いました。

年齢とともに読むジャンルも育児書、教育や健康関係の本、心理学系、自己啓発書などに様変わりしました。私にとっては、どのジャンルの本も教えと勇気を与えてくれる内容でしたが、最近、以前のように感受性を高められるような本を読みたいと思うようになりました。そこでまず、昔難関に感じ、読むのをあきらめた作品にチャレンジしたいと思っています。当時はイメージがわかずに自分のものにできなかった作品を、今なら味わい深く感じ、読み進めていけるのではないかと思うからです。

読書を始めるきっかけは人それぞれです。一見失礼に思われる冒頭の言葉も、今になっては私を読書の習慣に導いてくれた感謝すべきものだったと実感しています。

公共図書館と大学図書館を経験して

中央図書館事務部
収書・整理課　寺島靖子

近畿大学中央図書館収書・整理課に配属される以前、私はいくつかの公共図書館で勤めてきました。今回はその経験をもとに、レファレンス業務と目録作成業務の関わりについて、また資料保存の面から公共図書館と大学図書館を比較し、稚拙ながら私見を述べさせていただきたいと思います。

公共図書館では、レファレンスや貸出返却、書架整理など、開架での利用者とのやりとりがおもな仕事でした。調べもののお手伝いをしたり、ご希望の本の書架までご案内したりと、利用者とじかに接する公共図書館での仕事は、日々新しい発見の連続で飽きることがありませんでした。また、お探しの内容にぴったりの本をお渡しすることができたときの嬉しさはひとしおで、図書館員としてのやりがいをひしひしと感じたものです。

けれども、そんななかでいつも心にあった

のは、「レファレンスに使っている蔵書検索は、探している本をいつも的確に導き出してくれる。では、一体どのような目録作成をすればこんなにも機能的な検索システムを作れるのだろう…」という、目録作成業務に対する興味でした。

そして昨年４月、中央図書館収書・整理課に配属され、これまでずっと気になっていた図書の受入から目録作成業務に携われることになりました。OPAC の目録には、タイトルや著者、出版社などの基本的な情報はもちろんのこと、参考文献のページや、タイトルからは判別できない内容を表す件名標目表など、ひとつの資料に対して、本当にたくさんの詳細情報が登録されているのを目の当たりにしました。「なるほど、これであの便利で正確な蔵書検索が可能になるのだな」と、感嘆したのを今でも覚えています。

こうしてレファレンス業務と目録作成業務を両方経験できたことで、丁寧できめ細やかな目録作成が充実したレファレンスへつながるということ、そして目録作成とレファレンスをとおして、一見すると対極にあるバックヤード業務とカウンター業務が、表裏一体、互いに支えあってこそ図書館は成立しているのだと、改めて実感することができました。

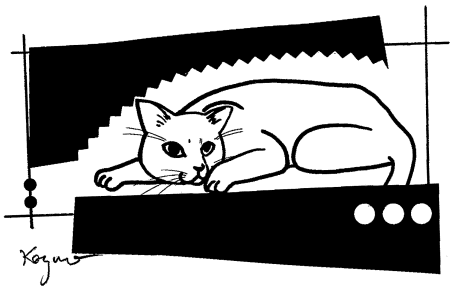
次は、図書館運営にかかせない資料保存の面から、公共図書館と大学図書館を比較し、大学図書館のこれからの役割について考えてみたいと思います。

公共図書館では、基本的に市民の娯楽や生活に根づいた資料を購入し、流行のものを多く所蔵する傾向にあります。しぜん資料は消耗品扱いになってしまい、利用が多いほど傷みのひどいものも増えてきます。けれども現在の公共図書館は、運営費、人件費ともに削減される一途で、慢性的な資金不足のために、修繕までお金をかけられない図書館がほとんどです。実際、どんなに傷んでいても、その場しのぎの応急処置をしただけで書架へ戻してしまうことが日常茶飯事でした。

このように多くの公共図書館では、資料の保存については二の次となり、いかに費用をかけずして利用者のニーズに応えられるかが重要になってしまっているように感じます。

対して大学図書館では、学生の勉学、教員の研究に必要な資料の収集が基本となります。公共図書館とは違い、流行の読み物や娯楽性の高いものは少数になりますが、貴重書のような歴史的、学術的にも価値のある書物など、後世に残すべき優れた資料の収集を行なえるのは、やはり資金面の安定している大学図書館ならでの強みと言えると思います。

利用者への資料提供は当然のことながら、より多くの資料を最善の状態で後世に残していくことも、図書館としての大きな役割のひとつです。今こそ、多くの優れた資料とともに、資料保存のための設備や環境を持ち合わせた大学図書館が、過酷な環境下にある公共図書館にかわってその役割を担うときなのではないでしょうか。

電子化が急速に進む現代において、時代錯誤と言われてしまうかもしれませんが、いつの時代も、書架を眺め、手にとって、じっくりと好きな本を選ぶことのできる場所こそ、図書館のあるべき姿だと私は信じています。

まだまだ未熟者ではありますが、これからも近畿大学中央図書館の一員としてよりよい図書館づくりのお手伝いができれば、と一層気の引き締まる思いです。